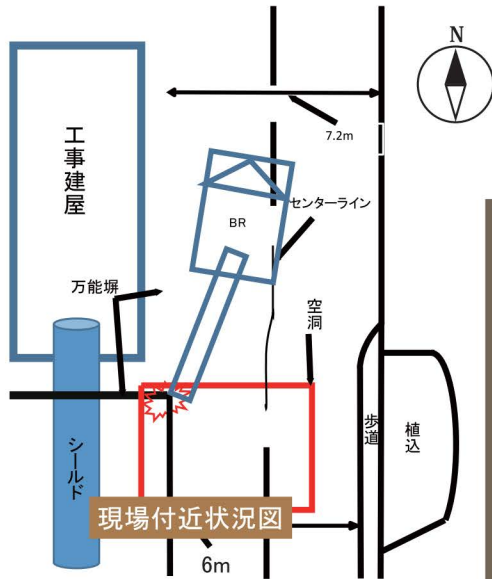
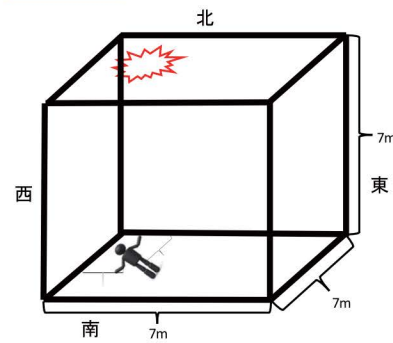


現場付近状況図



空洞拡大図



下は土が無い状態であった。
ここまでで把握できたのは、
要救助者は5m程度落下しており
現在のところ意識清明である
ものの、転落時の打撲等詳細は
不明で、今後要救助者の症状は
変化する可能性があること。そ

して何より陥没した空洞がいつ
拡大するか、予測は極めて困難
である。したがってこの救助活
動は慎重かつ迅速に遂行する必
要があるということである。
救助活動方針は、消防車内で
走行中に隊員に指示していたは

しごクレーンをすでに作成中。こ
れを一手とし、穴周辺の再陥没
の危険を確認したため、二の手と
して空中からの救助活動を検討
する必要がある。
L(はしご車)、LT(高所作業
車)又はBR(救助工作車Ⅲ型)の

クレーンの活用が頭に浮かんだ
が、最もデリケートな操作が可能
で、先端形状が支点として最も適
しているかと判断し、BR1隊を増
強要請した。
また、三の手として穴の上には
万能塀と呼ばれる工事建屋を囲
む単管で組んだ高さ3m程度の
塀(現場付近状況図参照)を活用
する方法を考えたが、工事関係者
に塀の強度を尋ねると「塀の下も
陥没しているのでわからない」と
いう回答であったため、三の手は
一旦保留した。
まもなくはしごクレーンの設
定準備が完了した。ただし先程の
情報で要救助者の東側が3m程
度空洞であるということは、道路
上のセンターライン付近(現場付
近状況図参照)まで空洞が広がっ
ていることを指し、このため三連
はしごの三連目を若干伸長し、基
底部をできる限り穴から離隔距
離を稼ぐ設定としたものの、安全
を考慮して東側の歩道付近まで基
底部を後退させると、はしごク
レーンの設定角度が浅くなり、有
効な活動が困難となるため、はし
ごクレーンによる進入、救出は断
念した。